

時間的福利と欲求充足説

佐々木 渉 (Wataru Sasaki)
大阪大学大学院人間科学研究科

時間的福利(Temporal Well-being)とは、ある人の人生における、特定の期間や時点がその人自身にとって(どれほど)良い状態(悪い状態)であるかを表す価値である。福利の理論(Theory of Well-being)とは、何が福利を構成するのかについて述べる理論だが、その候補の一つである欲求充足説(Desire Satisfaction Theory)によれば、私たちの福利の水準が増進/減退するのは私たちの欲求が充足/挫折されるときである。

欲求充足説を仮定し、時間的福利について考えるとき、私たちは時間的に離れた欲求の充足(挫折)の問題に直面する。時間的に離れた欲求の充足とは、次のようなものである。例えば、私が2011年に「2021年に富士山に登りたい」という欲求をもっていたとする、私はしばらくの間その欲求をもち続けていたが、やがて他のことに熱中しその欲求を消失したとする。しかし、2021年に実際に富士山に登り、2011年の欲求を充足してしまったとき、欲求充足説が正しいならば、このケースでは私の欲求は確かに充足されているから、私の福利の水準はいくらか増進するはずである。このとき、私の福利はいつ増進するのかというのが時間的に離れた欲求の充足の問題である。

これについての学説には、そもそも欲求充足説における主体の福利の増進は「欲求の保持と充足が同時に起きる場合のみである」とする説(同時説)、主体の福利は「充足の時点(欲求の対象が成立する時点)で増進する」とする説(対象の時点説)、「欲求の時点で増進する」とする説(欲求の時点説)、「欲求の時点と充足の時点の前後関係の違いによって増進する時点は異なる」とする説(非対称説)などで争いがあるが、欲求の時点説には、過去の欲求をよく説明できるという特徴や、死の害や死後の害を説明できるという特徴がある。それゆえ、本発表では、欲求の時点説の擁護を試みる。ここで、欲求の時点説の最大の問題点の一つは、それが次の内在原理(Internalism)に違反することである。

内在原理：ある人にとってのある時点の内在的価値は、その時点に成立している価値原子(基礎的内在的価値をもつ事態)によって完全に決定されている。

本発表では、欲求の時点説を内在原理に違反しない仕方展開するために、福利の理論が何を行う理論であるか、欲求の充足とは何を意味するのかを再考する。さらに、欲求充足説は、価値原子として「主体が欲求をもつという事態」と「欲求の対象となる事態」の複合的事態を考えるべきだという従来の考えを否定し、価値原子として別の事態を提案する。